園長通信～こころ～ №４２

積み木

2024.6.5

自分の幼稚園時代のことを思い起こした。通ったのは、保育園だった。路線バスに乗って自分で通っていた。その保育園は、お寺の敷地にあった。そんなに記憶があるわけではないが、断片的に覚えていることがある。

週に一度だったか、お寺の中に入り、手を合わせた。そのことに、どんな意味があったのかは覚えていない。お昼寝の時間もあった。学芸会のようなものがあり、劇をやった。保育園の園長先生は女性だった。園長先生の旦那さんは、小学校の先生だった。自分が小学４年生になると、その旦那さんが担任の先生になった。きれいな見事な字を書く先生だった。黒板の文字は、芸術品かと思うほどだった。だが、残念ながら、その影響を受けることはなかった。

保育園の思い出と言えば、何と言っても、積み木のことになる。保育園には、みんなで遊ぶための積み木があった。いつも取り合いだった。その日は、取り合い合戦に出遅れた。その結果、どうにも遊びようがないパーツを一つ手にしただけだった。そんなに泣く子どもではなかったが、さすがに泣きべそをかいた。

こんなことは珍しいことではない。こうやって鍛えられたという側面もある。話はこれで終わらない。ちょうどその日は、卒園アルバムの撮影日だった。よりによって、積み木の取り合い合戦が終了し、みんなが席についたタイミングで、シャッターがきられた。これまた、よりによって、泣きべそをかき、涙を手でぬうぐ自分が、一枚の写真の中心にいるではないか。

半世紀前には、こんなことが行われていたのである。卒園アルバムは、ずっと残る。遊びようがない積み木を手にし、悲しみに暮れる一人の園児を、容赦なくアルバムに載せる。そんな時代なのである。配慮のかけらもない。

それでも、やっていけた。我慢強さやへこたれなさ、辛抱強さがあった。あったというよりは、それらが自然と身に付くようになっていた。そんなに一人一人の園児のことを考えていたとは思えない。たぶん、保護者のほうが、保育園に行かせていただいているというスタンスだったのだろう。

隔世の感がある。一人一人の園児を大事にし、様々な配慮をするようになった。世の中全体がそうである。今のほうが正しいのだろう。だが、人として強くはならない。だからといって、昔に戻るべきかというと、そんなことはない。私のような子どもを出すべきではない。

通常、アルバムというのは、懐かしく楽しく見るものだろう。家人と結婚し、いつだったか、実家で大切に保存されていた私の小さい頃の写真を見る機会があった。卒園アルバムが出てきた。泣きべそ園児が自分であることを家人に話した。ことの詳細を説明した。それ以来、あの卒園アルバムは開かれてはいない。